

祝 富士山世界文化遺産登録



嶺 朋 会 報

平成26年2月28日発行

発行責任者
嶺朋会長
松本 玲子

印刷 富士ニュース社

みなさまには、お元気でお過ごしのことと存じます。日頃より、同窓会嶺朋に、大きなお力を寄せてくださいます。誠にありがとうございます。平成二十五年同窓会の活動も、おかげさまで、順次滞りなく進んでおります。永年の願いである生活館の修復が進展しない中、カーテンだけでも新しいものにしてあげたいと、同窓会がカーテンをつけさせていただきました。二つ目は、高樓祭で、「第二回同窓会のお部屋」をひき続き開催し、多くの来場で賑わいました。また、総会でいただきました貴重な募金は、東日本大震災で大



嶺朋会長
松本 玲子

吉原高校の大きな役割

災害に備えて

きな被害を受けた宮古市へ、昨年引き続き寄付いたしました。感謝の意が届いております。

さて、今年は各地で大きな災害が発生し、被害が続出しております。これを機に、各地で防災の動きがでております。母校吉原高校でも万が一に備え、生徒の安全を確保するために、備蓄品なども確保されています。また、近隣の町内の避難所として指定され、去る十二月一日に災害を想定し、避難訓練が実施されました。

明治四十二年、開校されて百五年、母校は、学び舎というだけでなく、地域の人々の命を守る役割を持つようになり、地域になくはならない存在になってきました。富士山も五合目で積雪、母校の発展を静かに見守っています。

平成25年度「嶺朋」総会に寄せて

昭和37年卒 原 静子



五月十二日(日)嶺朋総会はグラ
ド富士で二百十三名の参加をいただき
開催されました。当番学年を担当する
にあたり、二年前より富士北支部長の
河野さんと共に総会に参加し、昨年は
二十二名で出席し、当番学年のアトラ
クションでの結束力を拝見し、身の引
き締まる思いがいたしました。不安も
ありましたので、後日、三十六年卒の
学年理事の山本和子さんより詳しく役
割などのアドバイスをいただき、各ク
ラスで役員を決めて、同級生の参加の
呼び掛けをすることとなりました。ア
トラクションについては三十七年卒の
人達で行うこととし、詩吟、よさこい
に決められました。全員合唱の指揮と選
曲は辻村典枝さんをお願いし、一度き

りの当番を合言葉に頑張り、七十名の
参加があり、感謝と久し振りに再会で
きる喜びと緊張で総会を迎えました。
第一部の総会では、松本会長より在校
生の文武両道で目覚ましい活躍をこれ
からもサポートすること、将来に役
立つ講演会の開催など抱負と協力を求
めました。名誉会長の齊藤浩幸校長は、
在校生への支援と助言が励みとなるの
で、積極的に訪問して欲しいと話され
ました。来賓にご祝辞をいただき、議
事では神田副会長が議長を務め、すべ
てが承認され、スムーズに総会が閉会
となりました。第二部のアトラクショ
ンは富士山世界文化遺産がほぼ確定し
たことを祝い、詩吟「富士山」などを
吟じ、よさこいの総おどりの澗刺とし
た踊りに大きな声援が送られました。
最後に故郷、夏の思い出、いまだに癒
えぬ東日本大震災の復興支援曲の「花
は咲く」を全員で合唱し、心をひとつ
に祈り願いました。最後に来年の五月
二十五日(日)この会場で開催されま
すことを発表し、三十八年卒の皆様
に次年度の総会の当番を託し、第二部を
無事終了できました。来賓の皆様はじ
め同窓生の励ましとたくさんのご厚情
とご協力を心よりお礼申し上げます。

支部だより



原田支部
昭和33年卒
鈴木須美子

私と富士山
窓からの二十年

富士山世界文化遺産登録おめで
とうございます。今回は、「富士山
と私」がメインテーマということ
で困ってしまいました。私は富士
登山したこともありませんが、車
で五合目までがせいぜいでした。
登山等疲れるだけで、とんでもな
い、登山する人の気が知れない、
富士山は遠くから眺めるのが一番
だと思つてこの年まで来てしま
いました。

私とつての一番の富士山は、
勤務先が大淵だったものですから、
自宅のある原田から、毎朝、車の
窓から正面に見える富士山に向かっ
て車を走らせた。これだけで

も気分を良くしていたのですが、
会社の事務所の、私の机が北を向
いていたので、窓から富士山がそ
びえていました。幸いなことに、
遮るものが何もなく、四、五合目
くらいから上がすべて、見えまし
た。朝日に映える富士、昼の輝い
ている富士、夕焼けに染まる富士、
春夏秋冬、それぞれ違った富士山
を、二十年近くも見続けながら仕
事をして来ました。

県外から、見えられるお客様に、
自慢したものでした。退職する時
は、この窓からの富士山が見られ
なくなるのが、何よりも、悲し
く心残りでした。ほんとうに、富
士山は、世界に誇れるものと思
います。

最後に、原田支部のことを少し
報告させていただきます。会員は
一一八名です。年に一度、役員会、
総会を開催します。本部の役員会
の事業報告、支部の会計報告等の
後、食事会、出席者は二十名ほど
ですが、皆さん昔話等に花が咲き、
大変楽しい会となりました。本部
より神田副会長様が出席してくだ
さり、会を盛り上げてくださいま
した。昨年より、開催されました
高樓祭の、「同窓会のお部屋」に、

昭和三十七年卒の杉山ハツさんに作品を出展していただき、協力していただきました。今後の課題は、総会に多くの方が出席してください。何とか頑張っていきたいと思っております。



吉原支部
昭和32年卒
大島 章

同窓会で

十月二十五日、六年ぶりに同窓会が開かれた。卒業して五十七年も過ぎているのだから、髪も顔も大きく変化している。髪の毛は白く、寂しい状態になった者、うらやましくも黒々としている者―実にさまざまである。

出席者は、二十パーセントくらいであった。もう少し多数の参加があるものと思っていたのであるが、欠席理由を考えさせられた。「身体の不具合」「介添の必要」「先約

があり、日が重なり」といった言葉に、年月の流れを感じずにはいられなかった。あいにく台風二十七号の接近で、静岡直撃の情報が流れていた折でもあり、各クラスから選抜された幹事は、交通機関の麻痺などの心配もされたことであるう。

会が始まり、昔話に花を咲かせ、楽しい時間が過ぎていった。遠く大阪や三重県鈴鹿から出席してくれた人たちもあり、有難く思った。「丈夫で健康を保って出席でき、よかった。」

「今日は、なつかしい顔に会えて若返ったような思いだ。」

「次の会にも、必ず出たい。」
などと、皆の元気な顔が、会の成功を物語っていた。元大学院教授の作曲家による電子ピアノの演奏と斉唱も心に残った。

少人数ではあったが、あつという間の二時間半であった。

これから先、同窓会が何回開かれるかわからないが、健康に留意し、また出席できるよう頑張ろうと心に誓った。

同期生各位にも、身体にくれぐれもご自愛下さいと願ってやまぬ。

高 楼 祭 「同窓会の部屋」から



昭和47年卒
渡邊 好

あの懐かしき生活館に入ってすぐの右側に「同窓会の部屋」はつくられました。六月三日(月)高樓祭の日のことです。「同窓会の部屋」とは、吉原高校同窓生の趣味の作品を展示している部屋です。絵画・絵手紙・手芸・習字・写真・詩歌等々の作品が年齢を問わずに寄せられ、所狭しと展示された部屋はとても華やかで、なおかつ力強ささえ感じられました。

この日、当番として参加した私の心に強く残ったのは、この部屋では過去・現在・未来が肩を寄せ合っているという事です。寄せられた作品を作られた方々は、昭和二十九年の卒業生から平成十九年の卒業生まで実に五十数年の開きがあり、部屋にみまざる力強さの原因はここにありと思ひ



ました。そして部屋を訪れる人々は「頑張ったね。」と作品に見入る先輩から吉原高校に通う生徒とその保護者、そしてこの吉原高校への入学を願う中学生や小学生まで、様々な年代の方たちです。その方々が作品を前にして、感嘆したり笑顔になったりしているのです。生活館の二階の厨房では蕎麦等の軽食がふるまわれたり、和室では箏曲部の発表があったりして、そこを訪れるついでに寄ってくださる方々もいて、まさに「同窓会の部屋」は過去現在未来が和気あいあいと混在していました。ゆつくりできる方はお茶とお菓子を召し上がり、暫し、同期の友達と学生時代に戻られたり、親子でここにこしながら語られたり、作品展示室の隣のお休み処では世代を超えて終始和やかな雰囲気がありました。

私自身のことと言えば、四十数年を経て再会した友達は昔の面影そのままに、話をすれば「〇ちゃん。」と呼び合っていて、時の流れを忘れさせてくれました。母校はいいものだ、心晴れやかに感じた「同窓会の部屋」でした。

臚げな記憶そして老婆心



昭和36年卒
藤 齋 昭 和

今夏は『熱中症に注意』の報道がどれだけ出たろうか。最後に耳にしたのは十月八日、カーラジオからのものでした。そして衣替えのタイミングを逸した暑さが続きました。その夏の盛り、我が家の受験生が高校見学会で吉高に参加した時の感想は①生徒が生き生きしている②高校生の方から挨拶してくれた③生徒による説明会の進行が上手だった④部活が楽しそうだったと。母校の事を好印象に話して、ちよっと嬉しくなりました。

卒業して五十余年も経ち、その

頃の生活振りは思い出せず、アルバムを開いてみて、部活のスナップの運動部コーナーで記憶のスイッチオン!!入学と同時に先輩たちと言葉巧みに誘われ、中学の続きでバレー部の一員に。当時は九人制で、一年生からハーフセンター(中衛)のレギュラーだったと思います。その根拠は二年先輩・一年先輩、そして一年後輩のフオワードセンター(前衛)にボールを返したのをはっきり覚えていいるからです。当然バックセンター(後衛)もいる訳で、三人のセンターが禁止されている海水浴に行った事は、ずっと秘密事項の筈です。前衛はムツちゃん、後衛はアヤちゃん、二人は後輩ですから私が唆した行動でしょう。そこから始まった交友関係は今も続いていて、人生に落ち込んだとき、どれほど助けられたか言葉に尽くせません。日々きつい練習でしたが、顧問の鈴木弘先生、木内先生はじめ、漆畑先生、繁富先生、河野先生、清水先生、雨宮先生(思い出せない先生、ごめんなさい)多くの先生方と試合したことは、本当に楽しかった。この頃の先生方は余裕があったのではないかしらと推察致します。今後も多くの吉高生が誕生することでしょう。たくさんの出会い

をし、交友関係を築き、私には一切出てこなかった肝心の勉学に励まれ、充実した高校生活を過ごされることを老婆心ながらお祈り申し上げます。

鈴虫のこゑ黙読の行間に

富士の恵みに感謝して



平成4年卒
佐野美奈子

田子浦の自宅から、自転車車で必死に坂道を上り、三年間休むことなく通った吉原高校。雄大な富士山が目の前に広がる天気の良い朝は、気分爽快になりペダルが軽く感じられたものです。模試当日の自信がない時も、裾野まで広がる富士山を校舎の窓から眺めると、きつと今日は良い結果を出せる、と不思議と力が湧いてきて、乗り越えることができました。

二年のアメリカカホームステイ体験時は、ホストファミリーに我が街や学校を紹介できる様、事前に多くのことを調べました。これを機に、富士山が自分の暮らしと深く結びついていることを改めて実感し、いっそう富士山を身近に思

えるようになりました。進学した県内の大学では、富士山を望める環境で学べることを喜ぶ、多くの県外・海外出身の仲間に出会いました。彼らに富士山を褒められると、私も何となく身内が良く言われたように嬉しくなる、その気持ちは今も同じです。

食卓を任される主婦となった今、富士山の豊かな風土がもたらす食の恵みに感謝する毎日です。私にとって、体に馴染むのは何といても地元で採れる水や食材であり、おいしく楽しくいただくことで心も満たされます。富士の食や農の関心をさらに高めたくて、今夏「富士山麓食の都作り交流会」に参加しました。豊富な地元の食材を作り活かす生産者と料理人の熱い思いを直に感じる事ができ、心強く思いました。

高校を卒業して二十年以上経ち、学校の様子も時代とともにだいぶ変わったと聞きます。それでも校舎の後ろには富士山があります。この美しい眺めは今も変わりません。学校前を通るとあの頃が懐かしく思い出されます。今までも、そしてこれからも、この地で暮らしていることを誇りに、健康で心豊かな毎日を送っていきたくと思っています。

母校から見る富士山



平成15年卒
加藤 慎也

このたびは、富士山の世界文化遺産登録おめでとうございます。私の富士山への思い出を少しお話ししたいと思います。

私は、吉原高校を卒業してから十年が経ちました。今あらためて、その当時は思い返すと色々なことが思い出されます。仲間と楽しく過ごしたこと、進路が決まらず先生と最後まで悩んだこと、高樓祭で盛り上がったこと、昼休みに販売をしていたパン屋さんのことなど、楽しかったことはもちろん、辛かったことさえも今では良い思い出です。

そして、私の中で一番印象に残っているものは、正門を入ると迎えてくれる雄大な「富士山」です。学校生活で辛いことや苦しいことがあっても、富士山を見ると少し心が落ち着き、ホッとできる、時には決意を固めるときに、富士山に向かって決意表明をしたことも

あったように思います。

私は現在、社会福祉協議会に勤務しています。誰もが住みよい地域社会を築くため、在宅福祉活動、ボランティア支援活動、相談援助活動等を行っています。そして、私の担当業務の一つに「赤い羽根共同募金」があります。

私は先日、学校募金推進のため、母校である吉原高校に協力のお願いに伺いました。懐かしの母校の正門を入るとやはり迎えてくれたのは「富士山」でした。加えて、対応してくださいました先生が、吉高時代お世話になった秋吉先生だったのです。先生は、私のことを覚えていてくださり、「よく覚えているよ。一組だったよな。あの頃…」と最近のことのように十年前の話をしてくださいました。母校から見える富士山は何一つ変わらず、さらに思い出話に花が咲き、吉高時代に戻った気持ちになりました。卒業して十年。「母校と富士山」は、今も私たちのことを大きく、強く、優しく見守ってくれているように感じます。私も吉高の卒業生。卒業生のひとりとして、母校のことをこれからも応援し、見守っていきたいと思います。

学校だより

富士のもとで育つ人材



学校長
齊藤 浩幸

私は大学四年間と公立高校の教員となった最初の五年間以外は沼津や三島、現在も清水町で生活していますので、富士山が見える生活はごく自然なことです。柿田川公園も近くにあり、夏の涼を求め、年数回は湧水群を散歩がてら見えています。

この地区にも湧水に関する名前が数多くあり、白糸の滝を訪れた時も、水の透明感や豊富な湧水量に驚き、後世に残さなければならぬ大切な自然であることを再確認しました。

さて、富士山が世界文化遺産登録されたことを契機に多くの外国人がこの地を訪れます。私たち日本人のもつ「お・も・て・な・し」の心に加え、歴史、信仰、産業、環境など、富士山に由来する豊富で多岐

にわたる知識をもち、日本語以外の言葉で説明することが求められるます。私自身、富士山の存在が当たり前すぎて、積極的に学んでこなかったことを反省しています。

吉高には、国際科があり、三週間のオーストラリア研修を代表とした国際理解教育を展開しています。毎年十名程度の生徒が、一年間留学し、近年では、ヨーロッパなどの英語圏以外の国々を選ぶことも増えつつあります。また、校内では、交換留学生が吉高生の一員として学び、昨年十一月には台湾の馬公高級中学校生が来校し、歓迎交流会や普通科の授業に参加し交流を深めています。

吉高は、今後さらに進むだろう多文化共生社会で活躍できる資質を有する人材を育てています。富士山はもちろん、この地元の素晴らしさを、訪れた外国人に伝えることができ、校舎から望む富士山のように懐深く度量の大きな人材となることを期待しています。

高樓祭で同窓生作品展を開催し

（次ページへ続く）



男子サッカー部

顧問 遠藤 貴光

ていただいている生活館の改修は本校の課題でありました。県教育委員会からは平成二十八年度改修工事との方針が示されましたが、一年でも一日でも早い着工を目指し、松本同窓会会長をはじめ、同窓会の方々にも御尽力いただいております。

吉原高校に赴任し、今年で四年目となります。チームを率いて一年目のインターハイ。一次リーグ全敗。二年目、三勝一敗(決勝トーナメント進出)、三年目、二勝二敗

さらに、昨年七月には、カーテンを寄贈していただき、各部屋の色彩も明るくなり、日ごろ練習会場として使用している箏曲部員も大変喜んでおります。今後も合宿等有効に使わせていただきます。本当にありがとうございました。

という結果。四年目の今年こそ、インターハイ県大会出場を目指し日々の生活を大切に送っていききたいと思っております。な

ぜ日々の練習ではなく、日々の生活なのか？それは二年目のチームを率いていたときのごきごきが印象に残っているからです。二年目のチームも新人戦まではまったくと言ってよいほど勝つことができませんでした。しかし、新人戦後の雨練習の時でした。いつも通り校舎内でトレーニングを行う予定で集合したとき、きれいに整頓された外用シューズが目に入ってきたのです。それまで何度となく注意をされてきてできなかったことが、百八十度変わった瞬間でした。その日を境に、生徒は、どうすれば自分達が成長できるのかを考えるようになりました。特に新しい練習を取り入れた訳でもなかったのですが、日々上達していく姿が目に見えて伝わってきました。なにごとにおいても心の成長が大きく関係していることを痛感した出

富士山と吹奏楽

顧問 杉崎 藍

来事でした。二年目でチームは大きく成長しました。もう一つ心が磨かれたとき、チームとしての目標を達成することができると信じ、日々の生活を大切に、当たり前のことを当たり前にしっかりとできる集団を目指し成長していきたいと思っています。

私は「富士山」と聞いて、すぐに思い浮かべるのは、小学生のとき合唱クラブで演奏した、峯陽作曲、小林秀雄作曲「百年たったあの日の朝」という曲のことです。曲は、宇宙船に乗って富士山のことを、地球語で話すという、内容です。富士山を父さんのように大きく、母さんのように優しく、姉さんみたいにきれいだど例え、銀河系宇宙のどこにも無い山としています。宇宙船から見える富士山に対して「元気でね、富士山。行ってくるよ」と呼びかけているところは、聴いている人達を温かな気持ちにさせてくれます。

さて、吹奏楽と富士山とは関係ないように思いますが、音楽創りで大切なことは、登山と同じなの



ではと思います。音楽は華やかな世界ですが、それはステージに立ったときだけです。一瞬の華やかさの裏には毎日の積み重ねがあれば、華やかさを放つことはできません。

登山も楽な道のりとは言えないでしょう。ですが、富士山を登ったときの感動は、登った人にしか味わうことができません。演奏は、勝ち負けではなく、どれだけ人をひきつける事ができるかなのではないかと思います。楽にできてしまふ事なら、何も感動はしないでしょう。音楽に対して、どれだけ向き合うことができるかが大切です。音には内面が表れます。生徒たちには、音と向き合い、音楽を心から大切に三年間を送ってほしいです。

家庭部食生活班

部長 鈴木 優茄

私たち家庭部食生活班は、先輩後輩関係なく部員みんな仲良く活動しています。

文化祭準備では、各班に分かれ、さまざまな案を出し合い、試作品をそれぞれ作り、一番安くおいしくできるものを選びました。そして文化祭に向け、よりおいしいものを提供できるように、試行錯誤を重ねました。その結果、当日は、チケットは完売し、おいしかったという声をたくさんいただきました。

日々の部活動では、班ごとに協力し合い、それぞれの班で違ったものを料理しています。次の文化祭に向け、料理の腕を磨きたいと思います。そして、つけナポリタンのように、富士市のご当地グルメになるような料理を考え、文化祭でみなさんに発表できればいいなど考えています。



「最初」の努力

伝統は続く

顧問 奥辻 敬一

富士山が世界遺産となり、数か月が過ぎた。入山料など多くの課題を抱えており、周辺の環境整備にはしばらく時間がかかり、「最初」の一年が鍵となるのかもしれない。

(男女共学となつてから) 吉原高校野球部は十年目を迎えた。しかし、富士山同様、一年目には練習場所の確保や環境整備など多くの苦労があった。「最初」は同好会でスタート。メンバーは三人。中には野球経験のない素人もいた。何とか校内で練習をと強く願ったが、野球部は練習場所を転々とするジプシー生活。球場、河川敷、中学校、大学、企業のグラウンド

：なかなか軌道には乗らなかった。その後部員も増え、野球部に昇格した一年目(平成十六年度)には、練習試合や大会にも参加できるようになった。しかし、その年の夏は0-17のスコルド負け。二年目(平成十七年度)の夏もスコルドこそ免れたものの0-6で負け。そして飛躍した三年目(平成十八年度)、三ヶ日・金谷・浜松日体を

破り、夏初勝利からの四回戦進出へ。第五シード静岡工業(現静岡高校)に六回まで4-1とリードしていたが、逆転を許し、4-6という惜敗を喫した。ベスト8まであと少しのところであった。

夏の大会が近づくと、当時の同好会および野球部のメンバーであったOBやOGの方から差し入れをいただいている。毎年この激励が選手達を奮い立たせ、大きな力になっている。そんな多くの声援をうけた本年は、平成十八年度以来となる三

演劇の魅力

顧問 深澤 直幸

吉原高校に赴任して、今まで経験したことのない演劇部の顧問をやることになりました。

今までもそうですが、台本選びが難しい。はじめは、高校演劇の脚本を片っ端から読んでみたのですが、正直、面白くない。感動的な脚本も中にはあるが、その脚本で演劇をやる意味がわからない。そこで、ある時期から、脚本を選ぶよりも作ることに切り替えました。生徒といっしょにアイデアを出し合って、まずプロットを決めて会話をつくっていく。こ

回戦進出となった。実に七年ぶりだ。大切なのは練習環境ではなく野球に対する姿勢。みごとに結果を出してくれた。「最初」をどのように作るか。何事においても大切な基盤となるのではないかと思う。我々野球部は、OBやOGが作ってくれた基盤を大切にし、さらに強固なものにしていかなければならない。そのためには、「最初」を大切にしている富士山のように、初心を忘れず、一生懸命に白球を追いかけるだけである。

れは大変な作業ですが、納得のいくストーリー展開ができた時はうれしいものです。「こういうメッセージを伝えたい」という衝動が物語となつて、台詞として動き出して届けられる現実には、言いしれぬ魅力があります。特に、昨年作った「かごめかごめ」と今年作った「愛のために」は、演劇部の生徒たちの素晴らしい感性と熱心な取り組みによってでき上がった傑作です。心に沁みる作品になっていきますので、再演したいくらいです。毎年十一月にロゼシアターで行われる演劇発表会に是非一度足をお運び下さい。

仲間の小甚

短歌 (富士を詠む)

散歩路に仰ぎ見る富士雪のある朝
あり溶けて筋なす朝あり
大正十四年卒 小野 とく
台風一過澄みたる空に富士山の初
冠雪は六合目ほど
昭和二十年卒 稲葉 正子

病室の窓より望む雪富士にかかり
て動かぬひとひらの雲
昭和二十七年卒 渡辺 義子

夏至の雨富士の頂に雪降らす遺産
の趣いや増す夕べ
昭和二十七年卒 田村百合子

晩秋の富士山五合目に今し立ち山
に礼する遠来の友
昭和三十年卒 福西美枝子

ドアマミラーにも夏は溢れてゐたり
けり入道雲に蒼き富士山
昭和三十一年卒 古館 秀雄

世界遺産祝ふごとく晴れし日をう
から茶を摘む富士の麓に
昭和三十一年卒 松下 孝子

くつきりと夜の富士山聳ちるたり
頂の雪闇に紛れず
昭和三十六年卒 丸山 一江

深ぶかと愁ひをたたふる今朝の富
士大笠笠雲頂にのせて
昭和三十八年卒 太田 若代

銀色に色づく唐松下に見て富士山
五合目雲界の中
昭和三十九年卒 漆畑 典子

俳句 兼題 富士山

永き日の素顔なる富士仰ぎけり
昭和二十一年卒 杉山 和子

轉りや田毎富士おく千枚田
昭和二十七年卒 竹川寿美枝

初冠雪暮らしを見つめ居る富士山
昭和二十七年卒 渡辺 隆夫

富士新雪駅は電車の出払って
昭和二十八年卒 土屋みさ子

小春日や庭師の缺遠き富士
昭和二十八年卒 依光 悦子

白妙の雪のふじやま輝かし
昭和三十年卒 遠藤 伸子

暮れ初むる富士の冠雪茜色
昭和三十年卒 加藤ふみえ

全容の富士を窓辺に昼寝かな
昭和三十三年卒 近藤 幸子

朝歩き亡夫のような大冬木
昭和三十四年卒 尾澤三千代

歎ひとつ越え初富士に歩み寄る
昭和五十五年卒 上田日差子

支部長名簿

平成26年2月現在

支部名	氏名	卒年
吉	原 鈴木 武子	27
今	泉 伊藤八枝子	40
広	見 小林 昭子	40
青	葉 佐野 敏江	31
大	淵 藤田 輝枝	36
原	田 鈴木須美子	33
吉	永 豊田 幸子	34
須	津 涌田 典子	35
元	吉 原 米山てる美	38
今	泉 北 渡辺 昌則	27
吉	永 第2 望月留美子	43
富	士 見 台 芳澤 馥子	34
浮	島 太田 若代	38
鷹	岡 為田多喜子	33
岩	松 影山 玉実	53
富	士 北 河野まさ子	37
富	士 南 鈴木 紀子	34
田	子 浦 安田 幸子	38
富	士 宮 加藤 雅子	37
沼	津 猪浦 玲子	47
静	岡 宮下 能弘	28
関	東 荒井 幾子	31
富	士 川 望月のり子	41
松	野 原 郁美	50
蒲	原 宇佐美節子	38

編集後記

「今回のテーマ」は、富士山の世
界文化遺産登録に因んで「富士山と
私」と致しました。

皆様、有り難くも大変協力的に原
稿をお寄せ下さり、改めて富士山を
誇りに思っておられることに感銘を
受けました。

編集委員が二名代わりましたので、
よろしくお
願い致しま
す。

今号の内
容について、
ご意見・ご
感想をお寄
せ下さると
幸いです。次
号の紙面づ
くりの参考
にさせていただきます。

ただきます。
(神田)



編集委員が二名代わりましたので、よろしくお願ひ致します。(神田)

お知らせ

平成26年度 吉原高校同窓会
「嶺朋」総会

日時:平成26年5月25日(日)午前10時~
会場:ホテルグランド富士
会費:5千円(当日会場で、申し受けます)
※申し込みは各学年理事まで

顧問	飛奈 昇	編集委員長	神田富美子
編集委員	川島 けい	渡井 明子	佐藤 明子
	川島 けい	沼枝 渡邊 弘子	小川 君子